

九段の桜（本宮三香） 短歌（大江一二三）

短歌 靖国の宮にみ霊は鎮まるも

をりをり かへれ母の夢路に

至誠 烈々 乾坤を貫く

忠勇の 誉は 高し 靖国の 門

花は 九段に 満ちて 春 海の 若し

香雲 深き 処 英魂を 祭る

至誠烈烈貫乾坤 忠勇譽高靖國門

花満九檀春若海 香雲深處祭英魂

解説 九段の桜に寄せて靖国神社の英霊を弔い、その武勲をたたえたもの。忠義を尽くして国のために死んでいった多くの武人の生前の勇気をたたえ英霊の安らけくあることを祈る鎮魂の詩として知られる。

語釈 ※至誠Ⅱ最上の誠。※烈烈Ⅱ激しく、盛んなさま。※乾坤Ⅱ天地。※春若海Ⅱ桜の花が到るところに咲き乱れて風に揺れ、あたり一面波打って見え、あたかも、この春爛漫の様子は海のようなものである。※香雲Ⅱ群がり咲く桜の花の様子。

通釈 国のために戦いに死んでいった者たちの誠の心は烈々として、この天地の間を貫くほどのものがあつた。その忠義武勇の誉れは、靖国神社の大鳥居のように高く尊い。春を迎えた靖国の社には、今年も桜の花が咲き乱れ風に揺れて、あたかも海のように見える。かくも群がり咲く桜の中に英霊は祀られ、安らかに眠っているのである。